

韓国における日本語学研究的概観

金 世恩

要 約

韓国において本格的な日本語研究が始まっておよそ 20 年以上になる。歴史的な時代背景から長い暗黒期があったが、学校教育における日本語教育が始まってから日本語を専攻した研究者を輩出するまでまた長い時間が必要であった。1975 年から韓国で修士論文が発表され、以来日本語専攻者による日本語学研究が形を整えることになった。本稿では 1945 年から 2009 年現在まで韓国における日本語学研究を概観した。1945 年から 10 年単位で時代を区分し、それぞれ単行本、学位論文（修士・博士）、雑誌論文の枠組みの中で日本語学研究の流れを見た。

【キーワード】韓国、日本語学研究、研究史、単行本、学位論文、雑誌論文

本 文

1. はじめに

韓国で本格的な日本語学研究が始まった 1980 年代の半ばからおよそ 20 年以上が過ぎた。その間、飛躍的な発展を成し遂げ、量的にも質的にも成果を挙げてきた。今は韓国人による日本語学研究は韓国でも国外の日本でも盛んに行われている。

韓国初めての日本語学の研究史を整理した論文は 1976 年に発表されたイ・キムンの「日本語の研究と日本語教育」(『国語年鑑』、1976) である。以降、李徳奉 (1987、1996)¹、李鳳姫 (1988、1994)²、李漢燮 (1993、1998)³、李康民 (2000、2002、2003、2005、2008)⁴、李忠寿 (2001⁵)、ヨ・パクドン (2004⁶)、洪民杓 (2007⁷) など、数多くの論文が発表されてきた。本格的な研究と共に研究史の整理にも目を向けてきたと言えよう。

2. 研究目的

日本語学の研究史を整理したものが 1972 年から出ているが、その中でも「解放以降日本語学の研究動向と課題」(李徳奉、1996) は日本語学全般に渡りそれまでの研究史を整理したものである。また、1945 年から 1997 年まで発表された日本語学関連の研究を網羅して調査した『韓国日本語学関係研究文献一覧』(李漢燮、1998) がある。しかし、これら以外は研究史といってもある一部に偏っている傾向があり、全てを網羅しているわけではない。主に学会誌中心の研究史を整理したものが多く、単行本・学位論文・雑誌論文に分けてそれぞれを詳細に調査したものはなかった。そこで、本稿では 1995 年以降発表された研究について調査し、1945 年から 2009 年現在に至るまでの韓国における日本語学関連の研究史をまとめてみようとしてみた。

3. 研究範囲及び方法

研究文献を単行本、学位論文、雑誌論文にわけて調査した。李徳奉 (1996) では、1945 年から 1994

年まで発表された全ての単行本、学位論文、雑誌論文について調査している。本稿ではそれに続いて、単行本は 1995 年から出版されたものを調査した。学位論文においては修士論文と博士論文に分けて調査した。修士論文についても 1995 年から調査したが、博士論文は日本語専攻者によるものが 1994 年から出されており、全体の流れを確かめるために 1994 年から調査することにした。雑誌論文については 2007 年から 2009 年現在まで韓国研究財団に登録されている 16 の掲載学術誌と 7 つの掲載候補学術誌に掲載されたものを調査した。このほか 1995 年から 2006 年までの雑誌論文については李康民 (2000、2003、2005) の調査を参考にした。

調査方法は、韓国の国会図書館の情報検索 (www.nanet.go.kr) と韓国学術誌引用索引 (www.kci.go.kr) を参考にした。また、本来は日本語学関連の研究を整理することが本稿の目的であるが、日本文学と日本学の研究の成果についても簡略に言及することにする。

4. 日本語学関連の研究史

本稿は 1945 年から 2009 年までの研究を対象としているが、1945 年から 1994 年までの研究は李徳奉 (1996) をまとめた⁸。そして、1995 年から 2009 年までの研究について調査したが、1997 年から 2006 年までの雑誌論文のデータは李康民 (2000、2002、2003、2005) の資料を参考にした。

4.1. 1945 年から 1974 年まで

1945 年以降、30 年あまりは日本語においては暗黒の時代であった。李徳奉 (1996) は、「反日感情が強く影響したためでもあるが、また外国語観学習の影響の面も考えられる。つまり、当時の外国語学習というのは該当言語圏の文化と先進知識を習得する必要性によって行われたので、その外国語を学習するということはつまり善隣および尊敬の関係を意味し、

韓国の情緒としてはそのような事はありません。このように時代背景の中で、1961年韓国外国語大学に日本学科が開設され、1973年から高校では第2外国語として日本語が教えられることになる。同じく1973年には韓国日本学会

が創立された。

4.1.1. 単行本

単行本は1974年に日本で刊行されたキム・サヨップの『古代朝鮮語と日本語』を含めて2冊だけである。

<表 1⁹>

	語学 一般	日本 語史	音韻	語彙	意味	文字 表記	音声	文法	文章 文体	言語 生活	日語 教育	計
45~54	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
55~64	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
65~74	0	0	1	0	0	1	0	0	0	0	0	2

4.1.2. 学位論文

学位論文においても、大学における修士課程の開設が1973年になるので、修士論文は1975年からになる。それ以前に他の専攻において3つの修士論文が発表される。

<表 2¹⁰>

	語学 一般	日本 語史	音韻	語彙	意味	文字 表記	音声	文法	文章 文体	言語 生活	日語 教育	計
45~54	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
55~64	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
65~74	0	0	1	0	0	0	0	1(1)	0	0	2	3(1)

4.1.3. 雑誌論文

1970年代後半までは韓国の国語学者たちを中心に論文が発表された。これは韓国の大学院における修士課程の設立時期や時代背景と関係がある。韓国における最初の雑誌論文は1947年5月にチェ・ヒョンベが『朝鮮教育』12集に発表した「日本で漢字を使わないことを始めた」が挙げられる。日本語に關す

る初めての本格的な研究は1955年『学術院会報』1集に載せられたイ・スンニョンの「韓日両語の語彙比較考—糞尿語を中心に」を挙げられる。以降、主に韓日両言語の比較言語学的な研究が行われた。韓国人の日本語専攻者による最初の語学論文としては1970年に日本で発表されたイ・ヒョンギの「接続助詞 ど、ども研究」がある。

<表 3¹¹>

	語学 一般	日本 語史	音韻	語彙	意味	文字 表記	音声	文法	文章 文体	言語 生活	日語 教育	計
45~54	0	0	0	0	0	2	1	0	0	0	0	3
55~64	1(1)	2	0	0	0	0	1	0	0	0	0	4(1)
65~74	8(3)	0	3(2)	5(2)	0	9	1	7(2)	0	0	9	42(9)

4.2. 1975年から1984年まで

1973年に韓国外国語大学に修士課程が開設され、同じ年に全国規模の学会としては最初の韓国日本学会が創立され、同年に研究誌『日本学報』が創刊された。その後、1978年に韓国日語日文学会が創立され、1979年に『日語日文学研究』が創刊された。

4.2.1. 単行本

このような流れを踏んで、単行本の出版量が多少増えて、27冊が刊行された。

<表 4¹²>

	語学 一般	日本 語史	音韻	語彙	意味	文字 表記	音声	文法	文章 文体	言語 生活	日語 教育	計
75~84	4	0	4	1	0	4	4	6	0	0	4	27

4.2.2. 学位論文

学位論文は修士論文が1975年に初めて4本発表され、その後1984年まで144の論文が発表されるが、その半数ぐらいは対照研究である。

<表 5¹³>

	語学 一般	日本 語史	音韻	語彙	意味	文字 表記	音声	文法	文章 文体	言語 生活	日語 教育	計
75-84	0	4	7 (5)	18 (2)	1	6 (3)	6 (4)	92 (58)	1	1	8 (1)	144 (73)

4.2.3. 雑誌論文

雑誌論文は1975年以降急増するが、これは大学院の開設と全国規模の学会誌の創刊が原因として挙げられる。

<表 6¹⁴>

	語学 一般	日本 語史	音韻	語彙	意味	文字 表記	音声	文法	文章 文体	言語 生活	日語 教育	計
75-84	24 (14)	10	21 (15)	53 (20)	2 (1)	30 (4)	26 (11)	131 (60)	5	2 (1)	64 (7)	368 (133)

4.3. 1985年から1994年まで

1980年代に入って日本に留学していた日本語専攻者の帰国ラッシュが始まる。韓国における日本語学研究が本格的になるのもこの時期からである。また、慶常大学出身が中心になって1984年に大韓日語教育研究会が発足される。その後、1989年に韓国日本語教育学会と改称した。

4.3.1. 単行本

単行本の数が2倍以上増え、60冊が刊行された。分野別に見ると、語学一般と音韻、そして文法分野に偏っている。また、本格的な理論書や研究所は皆無に近い状態である。これはほとんどの学習者や研究者たちが専攻書籍を日本に依存しているため、韓国内の研究が自生する力を備えていないためであると思われる(李、1996)。

<表 7¹⁵>

	語学 一般	日本 語史	音韻	語彙	意味	文字 表記	音声	文法	文章 文体	言語 生活	日語 教育	計
85-94	13	1	22	1	0	2	2	14	0	3	2	60

4.3.2. 学位論文

学位論文においてもその数が2倍以上になった。論文の半数近くが対象研究であるが、これは韓国の日本語学の研究が日本語教育を念頭においていることと、韓国人の研究者だからこそ出てくる特徴ではないかと思われる。

<表 8¹⁶>

	語学 一般	日本 語史	音韻	語彙	意味	文字 表記	音声	文法	文章 文体	言語 生活	日語 教育	計
85-94	0	11	18 (7)	64 (30)	5 (3)	6 (4)	15 (5)	229 (107)	1	12 (3)	30	391 (159)

4.3.3. 雑誌論文

雑誌論文は以前よりその数が爆発的に増加している。これは韓国における日本語学関連の学会が増えたことと、日本から帰国した研究者たちが増えたことと関係がある。

<表 9¹⁷⁾>

	語学 一般	日本 語史	音韻	語彙	意味	文字 表記	音声	文法	文章 文体	言語 生活	日語 教育	計
85-94	41 (20)	45 (4)	48 (18)	133 (46)	16 (1)	62 (7)	66 (30)	602 (192)	16 (4)	27 (2)	174 (6)	1230 (330)

4.4. 1995年から現在（2009年）まで

1994年に韓国国内で初めて博士論文が発表される。また、90年代の半ばから各地域を中心に学会が創立される。

4.4.1. 単行本

単行本の数は111冊で、1994年以前に出版された量よりは多い。しかし、やはり111冊ということは、

李徳奉（1996）でも指摘しているように、日本語学分野の市場としての狭さ、弱さを表していると思われる。日本で出版されたものを翻訳したのが、語学一般4冊、日本語史2冊、音韻2冊、文法3冊、文章・文体1冊、言語生活1冊、日本語教育3冊、計16冊で、約14%あまりである。

<表 10>

	語学 一般	日本 語史	音韻	語彙 意味	文字 表記	文法	文章 文体	言語 生活	日本語 教育	その 他	計
85-94	15	8	7	11	4	28	3	5	20	10	111

4.4.2. 学位論文

<表 11>

年度	語学 一般	日本 語史	音韻	語彙 意味	文字 表記	文法	文章 文体	言語 生活	日本語 教育	その 他	計
1994	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1
1995	0	0	0	0	1	2	0	0	0	1	4
1996	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	2
1997	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1
1998	0	0	1	0	0	1	0	0	0	0	2
1999	0	1	0	1	1	6	0	1	0	1	11
2000	0	5	0	0	0	5	0	0	1	1	12
2001	0	2	0	0	0	6	0	0	3	0	11
2002	0	1	0	0	0	5	0	1	1	0	8
2003	0	2	0	1	0	3	2	0	2	0	10
2004	0	1	1	4	0	5	1	0	1	0	13
2005	0	3	0	6	0	8	1	4	4	2	28
2006	0	2	0	2	0	5	0	1	3	0	13
2007	0	1	0	2	3	9	1	2	5	0	23
2008	0	1	1	0	0	11	0	1	1	0	15
2009	0	0	0	1	0	2	0	0	4	1	8
合計	0	19	3	18	5	71	5	10	25	6	162

1994年から韓国内の博士論文が発表されるが、1994年から2009年まで日本語学分野で162本が発表された。修士論文は2005年以降5年間急激に増えている。<表 11>は1994年から2009年まで発表された博士論文をまとめたものである。韓国で日本語専攻者による最初の博士論文は1994年に出された金公七の「原始韓日共通語の研究」（中央大学大学院日語日文学科）である。また、韓国では学位論文が2月と8月に分けて年に2回出される。2009年の論文は2月に出されたものしか検索できなかった。

4.4.3. 雑誌論文

キム・ヨンキュン（2009）によれば、1997年から2006年の間、1788本の論文が発表された。この統計は1997年から2年単位で調査した李康民（2000、2002、2003、2005、2008）の結果をまとめたものである。この表を見ると、1997年から2006年まで発表者数と論文数が明らかに増加している。これは韓国の日本語学研究において非常に肯定的な面として受け取れるが、以前と違って研究者層が厚く、学問後継世代の増加と共に各大学と研究所、特に学会を中心に活発な研究活動が行われたことに起因すると見られる（キム、2009）。

<表 12¹⁸⁾>

年度	発表者	文字 表記	音声 音韻	文法	語彙	日本 語史	日本語 教育	社会 言語学	その他	合計	一人当 論文数
1997-1998	100	0	8	52	4	40	24	8	0	136	1.36
1999-2000	173	3	9	89	15	62	47	16	7	248	1.43
2001-2002	225	4	5	134	29	83	58	30	7	350	1.56
2003-2004	285	6	23	182	45	115	81	39	9	500	1.75
2005-2006	312	6	17	166	66	124	96	55	24	554	1.78
合計	1095	19	62	623	159	424	306	148	47	1788	1.63

しかし、この調査は韓国研究財団に登録されている登録学術誌、登録候補学術誌を網羅したものではなく、全国規模の学会誌を選択して統計を出したものである。これは前述したように他の論文においても同じ事で、つまり、1995年以降の雑誌論文に関してはまとまった調査が行われていないということである。

2009年現在、韓国研究財団に登録されている日本学関連の登録学術誌、登録候補学術誌は25以上になる。というのは、今回の調査対象に翻訳学に関する

学会誌は含まれず、また諸言語と一緒に研究活動している学会誌も含まれなかった。今回の調査対象になった学会誌と学術誌は23にのぼる。この中で、現代日本学会の『日本研究論叢』、韓日関係史学会の『韓日関係史研究』、日本史学会の『日本歴史研究』、韓国日本思想史学会の『日本思想』、韓日日本教育学会の『韓国日本教育学研究』は主に日本学を、韓国日本語教育学会の『日本語教育研究』と韓国日本語学会の『日本語学研究』は主に日本語学を研究する学会誌である。

<表 13>

(順序はハングルの表記順)

学会・学術団体	学会誌	日本語学 関連論文	日本文学 関連論文	日本学 関連論文	合計
檀国大学日本研究所	日本学研究	66	64	62	192
大韓日語日文学会	日語日文学	114	61	57	232
東北アジア文化学会	東北ア文化研究	18	4	24	46
東アジア日本学会	日本文化研究	75	105	81	261
日本史学会	日本歴史研究	0	0	34	34
日本語文学会	日本語文学	117	81	62	260
韓国外国語大学日本研究所	日本研究	87	69	51	207
韓国日本文化学会	日本文化学報	69	91	60	220
韓国日本思想史学会	日本思想	0	5	45	50
韓国日本語教育学会	日本語教育	76	34	33	143
韓国日本語文学会	日本語文学	91	85	50	226
韓国日本語学会	日本語学研究	119	0	0	119
韓国日本学会	日本学報	114	106	76	296
韓国日語日文学会	日語日文学研究	209	154	54	417
韓日関係史学会	韓日関係史研究	0	0	68	68
現代日本学会	日本研究論叢	0	0	57	57
高麗大日本学研究センター	日本研究	16	24	32	72
東西大日本研究センター	人文社会研究	6	4	33	43
中央大学日本研究所	日本研究	27	23	18	68
韓国日本教育学会	韓国日本教育学研究	0	0	60	60
韓国日本近代学会	日本近代学研究	48	24	81	153
韓国日本言語文化学会	日本言語文化	57	34	20	111
韓国日語教育学会	日本語教育研究	22	0	0	22
合計		1331	968	1058	3357

<表 13>を見ると、最近 3 年間、これらの学会誌で発表された論文数だけでも 3,357 にのぼる。平均すると 1 年当たり 1,100 以上の論文が発表されたということになる。その中でも日本語学関連の論文は 1331、日本文学関連の論文は 968、日本学関連の論文は 1058 であった。発表される論文数が多い学会誌は日語日文学研究（韓国日語日文学会）で、日本学

報（韓国日本学会）、日本文化研究（東アジア日本学会）、日本語文学（日本語文学会）がそれに続いた。ただ、『日本語教育研究』の 22 の論文は 2009 年に出されたものだけ集計した結果である。

また、分野別に論文を整理すると、<表 14>のようになる。

<表 14>

雑誌論文（2007 年～2009 年）

語学一般	日本語史	音声	語彙	文字	文法	文章	言語生活	教育	その他
9	74	45	173	45	445	38	77	300	90

この表で示されたように、最近 3 年間の雑誌論文においても、語彙、文法、日本語教育関連の論文が圧倒的に多い。

5. まとめ

以上、1945 年から 2009 年まで韓国における日本語学研究の流れを見てきた。1945 年から 1974 年までは日本語学研究においては暗黒期のような時代で日本語に関して目を向けることはほとんどなかった。1975 年から韓国でも日本語専攻者による修士論文が出され、1980 年代の半ばには日本から帰国した研究者たちによって本格的な日本語学研究が始まった。1980 年代から本格的に始まった日本語学研究は 1990 年代に入ってさらに研究者層を厚くし、研究領域も広げていった。今や国内で日本語学関連の博士論文だけでも年間 20 編近く発表され、主要学会誌で発表される論文だけでも年間 1100 編以上発表されるようになったのである。

しかし、いくつかの問題点も指摘できる。まず、1945 年から 1994 年まで刊行された単行本は 89 冊で、1995 年から 2009 年まで刊行された単行本は 111 冊に上る。一見、単行本の数が増加しているように見えるが、その数があまりにも少ない。これは韓国における日本語学研究の市場として現実を反映していると言えよう。そして、学位論文は 1990 年代半ばまでは韓国内の日本資料不足と日本語教育志向によって、文法・語彙に集中し、半数ぐらいは対照研究にとどまった。1990 年代半ば以降も文法と語彙に集中する現象は依然と続いているが、日本語教育関連の論文が急増している。最後に雑誌論文においては、先行研究の整理紹介がいくつかの学会誌のみに偏重されている傾向がある。そのため、長期的で精製された情報紹介が必要であり、2000 年以前の研究実績調査においては統計の確認が要望される。

注

1. 李徳奉(1987)「韓国における日本語学の研究状況」、『日本語学』6-4, pp.73-81
- _____ (1996)「解放以後日本語学の研究動向及び課題」、

- 『人文科学研究』第 2 輯、同徳女子大学人文科学研究所、pp.123-145
2. 李鳳姫(1988)「韓国における日本語学」『日本学報』第 20 輯、韓国日本学会
- _____ (1994)「韓国大学における日本語教育」『日本学報』第 33 輯、韓国日本学会
3. 李漢燮(1993)「韓国の日本語学研究どこまで来たか」『日本学報』第 30 輯、韓国日本学会
- _____ (1998)『韓国日本語学関係研究文献一覽(1945-1997)』、高麗大学出版部
4. 李康民(2000)「韓国における日本語研究(1997-1998)」『日本学報』第 45 輯、韓国日本学会
- _____ (2002)「韓国における日本語研究(1999-2000)」『日本学報』第 52 輯、韓国日本学会
- _____ (2003)「韓国における日本語研究(2001-2002)」『日本学報』第 55-1 巻、韓国日本学会
- _____ (2005)「韓国における日本語研究(2003-2005)」『日本学報』第 64 輯、韓国日本学会
- _____ (2008)「韓国における日本語研究(2005-2006)」『日本学報』第 74-2 巻、韓国日本学会
5. 李応寿(2001)「韓国における日語日文学関連学会の現状と問題点」『日本学報』第 48 輯、韓国日本学会
6. ヨ・バクドン(2004)「韓国の日本語関連学会の研究現況と課題」『日本文化研究』第 11 輯、東アジア日本学会
7. 洪民杓(2007)「韓国における日本語教育と研究の概観」、『日本文化研究』第 22 輯、東アジア日本学会
8. 本稿においては 1945 年から 1994 年まで (4.1 から 4.3 まで) の内容が李徳奉(1996)をまとめて整理したものである。李徳奉(1996)では韓国の日本語学研究における時代的な背景が詳細に説明され、単行本・学位論文・雑誌論文に分けてそれぞれを全体的な流れと傾向を分析しているだけでなく、分野別に詳細な分析も行っている。また、それまでの日本語学研究の大きな流れと問題点を指摘し、解決方法も提言している。
9. 李徳奉(1996)から部分引用
10. 李徳奉(1996)から部分引用
11. 李徳奉(1996)から部分引用
12. 李徳奉(1996)から部分引用
13. 李徳奉(1996)から部分引用
14. 李徳奉(1996)から部分引用

15. 李徳奉(1996)から部分引用
16. 李徳奉(1996)から部分引用
17. 李徳奉(1996)から部分引用
18. キム・ヨンギョン(2009)から引用

参考文献

李徳奉(1996)「解放以後日本語学の研究動向及び課題」、『人

文科学研究』第2輯、同徳女子大学人文科学研究所、
pp.123-145

李漢燮(1998)『韓国日本語学関係研究文献一覧(1945-
1997)』、高麗大学出版部

韓国国会図書館の情報検索 (www.nanet.go.kr)

韓国学術誌引用索引 (www.kci.go.kr)

きむ せおん／韓国同徳女子大学大学院 博士後期過程